Cambridge, 1929, pp 15~20　原典イギリス経済史より）

ここにみられるように、囲い込みが行われた理由は、穀物が非常に豊富であり、相対的に安価であったからである。この中で農民は耕地から追い出され、ナイトは、生活に困り、耕地を牧羊地にかえていったのである。

つまり、イギリスが多元的生産様式に本格的に向っていったのは、穀物の過剰生産によるものであり、イギリス資本主義のはじまりは、物価上昇の中の過剰生産、スタグフレーションであったのである。その後、1630年以降も穀物価格の下落が続くのである。

これに対し、ドイツでは、1630年以降は穀物価格は上昇している。

W＝アーベルはこれについて次のように述べている。『（穀物価格は）1651年から1700年までを一様に100とするなら、それに続く50年間（1701～50年）には102の平均価格となった。これはほんの僅かの上昇にすぎないが、

(20×20)

外国における価格の推移と比べるならば、この価格の上昇は顕著なものといえる。なぜならば、イギリスでは、小麦の平均価格は同じ期間に80%に低下し、フランスでは81%に下落しているからである。

　ドイツのこの時代は「農業の世紀」と呼ばれている。イギリスが穀物生産から新たな商工業の時代へと移行しつつあった時代に、ドイツは安定した農業の時代であった。イギリスに対してドイツは遅れた農業国として位置づけられる。

　すなわち、ドイツにおいては、過剰生産が持続せず、従って多元的生産様式への移行は遅れたものと考えられる。

[結び]

　この論文の最終目的は、歴史及び経済を一つの体系として把握することにある。そのために、人間論から始めた。この人間論には反発も多いかもしれない。人間はもっと複雑で

あり様々な行動をとると主張するだろう。しかし、科学とは、いかに単純な仮定からいかに有意義な結論を導き出すかであることを考えれば、本稿での態度は正当であろう。そして第3章集計量においては、マルクス及びケインズ両者があまり考慮しなかった労働の質の問題をクローズアップしておいた。これは第6章の経済モデルの中に有効な形で取り込まれている。労働の質をモデルの中に取り入れたものはそう多くないはずである。またテクニックとして、解析学的経済学が扱いにくい、消費空間の次元を変える労働というものを幾何学的テクニックによって成功しているといえるであろう。この時間軸を含んだ経済モデルはそのまま歴史認識に役立つのである。本稿の序に掲げた歴史法則もこれによりその意味が明確となり、多くの事実がより理論的に把握できるようになるのである。第4章及び第5章では、歴史理論として時間の流れに沿って展開し、その理論を第7章で実証して

おいた。以上をもって、本稿の概観及び結びとしたい。

［主な参考文献］

第３章

・資本論　マルクス

・雇用・利子および貨幣の一般理論　ケインズ

・マルクスの経済学　森嶋通夫

・二つの経済学　根岸隆・山口重克編

第４章及び第５章

・岩波講座世界歴史

・岩波講座日本歴史

・日本古代国家成立史の研究　上田正昭

・日本古代手工業史の研究　浅香年木

第６章

・価値の理論　ジェラール＝ドブリュー

・経済発展の理論　シュンペーター

第７章

・元禄・享保期の米価変動について

山崎隆三（大阪市立大経済学雑誌48巻4号）

・近世後期における農産物価格の動向　山崎隆三（大阪市立大経済学年報19集）

・部落の歴史と解放運動　部落問題研究所編

・広島県史

・ドイツ農業発達の三段階　W＝アーベル

・農業恐慌と景気循環　W＝アーベル

・原典イギリス経済史　浜林正夫・篠塚信義・鈴木亮編訳

歴史認識・経済認識について、他にも多くの文献を利用させていただいたが、その中で主なもののみ列挙した。

（1985年12月11日執筆
1988年9月1日加筆・修正完）

(20×20)

著者　泉　宏明

住所　〒739-0145　　広島県東広島市八本松町宗吉 92-5

HomePage

http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri_art/izumi/

copyright©2012　泉宏明 all rights reserved.